

§1 導入：「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：

§2 相対主義とは何か？

- (1) プロタゴラスの相対主義「人間は万物の尺度である」
- (2) 入不二基義の定義
- (3) グローバル相対主義「すべての真理はただ相対的に真であるにすぎない」
- (4) ローカル相対主義「相対主義の主張自体は、絶対的に真である」

相対主義が可能であるとすれば、ローカル相対主義として可能であろう。そして、これが可能であるかどうかを確認するためには、「相対的に真」「ある人 X にとって真」「ある概念枠にとって真」などが何を意味するのかを、明確にする必要がある。

§3 クーンのパラダイム論あるいは概念枠相対主義

■パラダイムの共約不可能性の理由

対抗関係にあるパラダイムが、共約不可能なのは次のような理由をドップルトはつぎのようにまとめている。

- (1) 同じ科学言語で語られていないこと、
- (2) 同じ観察データが提出されたり、承認されたりあるいは知覚されたりしないこと、
- (3) 同じ問いに答えたり、同じ問題を解いたりすることに関心がないこと、
- (4) 十全な説明あるいは正当な説明とさえみなされるものが同じ仕方で解釈されないこと

■共約不可能性からの観察言明についての帰結

クーンのパラダイム論は、パラダイムの異なる二つの科学理論が仮に同じ語を用いているとしても、それらの意味は異なると考える。しかし、科学理論の語彙は、(カルナップが主張したように) 日常言語で定義できるのではないか。もしそうならば、どちらの理論も、日常言語で言い換えることができ、比較が可能になるのではないか。

しかし、クーンのパラダイム論は、このような論理実証主義の科学哲学への批判を意図していた。論理実証主義は、科学的な言明を観察言明に還元することが可能だと考えた。カルナップによれば、物理学の言語は、日常言語の中の物にかかわる言語、物言語と、数学と論理学の言語によって定義可能である。したがって、物理学の観察言明は、物言語による観察言明に還元可能である。

ここに二つの可能性がある。

可能性1：確かに、後に論理実証主義の検証主義が批判されたように、物理学の言語である法則言明や、物理学の傾性語を用いた観察言明は、物言語による観察言明に還元可能ではない。物言語を共有していても、物理言語は、共約不可能になりうる。

可能性2：知覚が理論負荷的であるということは、物言語だけで知覚を記述するときにも、すでにそれらが共約不可能であるということであり、二種類の物言語があることになる。日常言語のレベルで、共約不可能なのである。

## § 4 Davidson による概念枠相対主義への批判

2002ss03 から転用 (若干変項)

ここでは、以下の翻訳から引用しながら、その議論を紹介する。数字は翻訳のページ数です。

Donald Davidson, 'Essay 13. On the Very Idea of a Conceptual Scheme(1974)' in "Inquiries into Truth and Interpretation" Oxford UP.,1984.

デイヴィドソン『真理と解釈』野本和幸、植木哲也、金子洋之、高橋要訳、勁草書房、「第9章 概念枠という考えそのものについて」(pp.192-213)

### 論文「概念枠という考えそのものについて」(1974)

#### A 経験論の第三のドグマ

デイヴィドソンは、まず「概念枠」を次のように定義する。

- 「概念枠」 = 「経験を組織化する方法」
- = 「感覚のデータに形式を与えるカテゴリー体系」
- = 「個人や文化や時代が眼前の光景を探求するための視点」 192

#### \*批判の核心

「概念相対主義(conceptual relativism)の支配的隠喩、すなわち複数のことなる視点の隠喩は、その基礎にあるパラドクスを暴露しているように思われる。異なる視点が意味をもつのは、それらの視点が記入される共通の座標系が存在する場合だけでしかない。ところが、共通の座標系の存在は、劇的な比較不可能性の主張に背くことになる。」 193

つまり、<二つの異なる視点の存在を主張するためには、それらを比較する共通の座標系が必要になる。しかし、それは比較不可能性の主張に矛盾する>ということである。

#### <言語と概念枠の関係>

「概念枠が異なれば、言語も異なる」 194 しかし、言語が異なれば、概念枠が異なるとは限らない。概念枠が同じならば、二つの言語間の翻訳が可能である。「概念枠は、…相互に翻訳可能な言語の集合と同一視されてよい。」 195

{Davidson は、概念枠相対主義を批判するが、言語相対主義を批判しないように思われる。この論文の最後を参照。}

### <第三のドグマ、最後のドグマ>

「私は、枠組と内容、組織化するシステムと組織化を待つなにか、というこの第二の二元論が、了解可能にも擁護可能にもなりえないことを力説したい。それは、それ自体ひとつのドグマ、経験論の第三のドグマなのである。これを放棄してもなお何かははっきりと経験論と呼べるものが残るか明らかではないから、これは**第三のドグマであるとともに、おそらくは最後のドグマ**でもある。」 201

経験論の第一と第二ドグマとは、クワインの論文「経験論の二つのドグマ」(『論理的観点から』所収)でともに否定されたものです。

**第一のドグマ**「分析的な analytic 真理、すなわち事実問題とは無関係に意味に基づく真理と、総合的な synthetic 真理、すなわち事実に基づく真理との間に、ある根本的分裂があるという信念」  
(飯田訳)

**第二のドグマ**「還元主義 reductionism、すなわち、有意味な言明はどれも、直接的経験を指示する名辞からの論理的構成物と同値であるという信念」(飯田訳)

上の引用の中でデイヴィドソンが言う「第二の二元論」に対応する「第一の二元論」とは、上のドグマのうちの「分析的真理と総合的真理の二元論」のことである。

ちなみに、クワインは、これらの二つのドグマの批判から、プラグマティズムの採用を宣言する。デイヴィドソンは、経験論をとらないということであるが、では、どのような立場をとるのだろうか。彼は序文で次のように述べている。

「枠組と内容の二元論を放棄することは、その主要な歴史上の現れ方における経験論の中心的なテーゼを捨てることに等しい。しかし、私は、友人や批判者たちが様々に示唆しているように、経験論に対する私の反対論が、私をプラグマティストと、超越論的観念論者ないしは「内部的」實在論者にする、ないしするはずである、とは考えない。これらの立場はすべて、私の攻撃する経験論と同様に、理解困難だと私が思う相対主義の一形式なのである。」(xii)

**彼の立場は、言語相対主義だといえるのだろうか？**

-----2002ss04

### **B 異なる概念枠の存在の主張への批判**

異なる概念枠があるといえるのは、「翻訳の完全な失敗」と「部分的な失敗」の二つのケースであるので、それぞれについて検討をおこなう。

(厳密に言えば、翻訳可能性については、「非対称性の可能性があるが、それは無視する」195と限定

されている。つまり、言語 x から言語 y には翻訳できるが、逆はできないというようなケースは、ここでは無視するということである。)

## 1、翻訳の完全な失敗 というケースは存在しない 195

### <論証1：翻訳の推移性に関連する論証>

「翻訳可能性の関係は推移的でないという理由で、身近な言語、たとえば英語への翻訳可能性は言語の規準ではありえない、と時おり考えられることがある。その趣旨はこうである。ある言語、例えば土星語が英語に翻訳可能で、さらに冥王星語といったもう一つの言語が土星語に翻訳可能であつても、冥王星語は英語に翻訳可能ではない。翻訳可能な範囲の差異も積もり積もれば、翻訳不可能な差異になろう。」196

「この頭の体操が、議論に何か新しい要素を付け加えるとは思えない。というのは、土星人のやっていることが冥王星語の翻訳であると我々がどのようにして認知するか、を問わねばならないだろうからである。自分のやっていることは翻訳である、と土星人の話し手が我々に語るかもしれない、あるいはむしろ、そう彼が語っているとわれわれが一時的に仮定するかもしれない。だが、その場合でも、我々の土星語の翻訳が適切かどうか疑問になりうるのである。」197

### <論証2 経験と一定の関係に立つが翻訳できないものは、見つからない>

(この論証については、今はスキップします)

## 2、部分的な翻訳不可能というケースも存在しない

「クワインに従って私は、根源的解釈の理論のための基本的証拠として、文に対するある種のきわめて一般的な態度を、循環や不当な想定無しに受け入れることができる、と提案したい。少なくとも当面の議論のためには、決定的概念として、真として受け容れるという文に向けられた態度に依拠してよいだろう。(いっそう完全な理論は、文に対する他の態度、例えば、真であることを願う、真かどうか怪しむ、真にしようと意図する、等々も視野に入れることになる。)」209

<われわれは、ある発話が、主張の発話であるとか、疑問文であるとか、推測であるとか、の区別を正しく理解できる>ということをクワインとデイヴィドソンは、事実として承認する。(これは、実に都合のよい恣意的な前提であるように思われる。)

「ある文をだれかが真とみなしていると知るだけでは、彼がこの文で何を意味しているのかも、また彼がそれを真と見なすことでどんな信念が表されているのかも知られない。それゆえ、文を真と見なすということは、二つの力のベクトルなのである。つまり、解釈の問題は、有効な意味の理論と受容可能な信念の理論とを証拠から抽出することにほかならない。」209

### \* 解釈の事例

「この問題の解き方は、ありふれた事例から最もよく理解される。ケッチが帆走するのが見えたとき、仲間が「見る、すてきなヨールだ」といったとすると、われわれは解釈の問題に直面することになる。ひとつの自然な可能性は、友達がケッチをヨールと勘違いし、偽なる信念を抱いた、とするものである。しかし、彼は眼もよく視線も適切だとすると、彼が「ヨール」という語をまったく同じには用いておらず、したがって通り過ぎたヨットの補助帆の位置を勘違いしているわけではない、とするほうがいっそう説得的でさえある。われわれは、この種の即座の解釈をつねに行って、信念に関する理に適った理論(reasonable theory)を維持するために言葉の再解釈を支持する決定をしている。」 209

### \* 解釈のプロセス

「話し手がどの文を真と見なすかしかわれわれが知らず、しかも彼の言語がわれわれ自身の言語であると想定できない場合には、話し手の信念に関して大変多くのことを知っているか仮定するかしない限り、われわれは解釈の第一歩さえ踏み出せない。信念に関する知識は言葉を解釈する能力を伴わない限り獲得されないから、出発点での唯一の可能性は、信念に関する一般的一致を仮定することである。話し手が真と見なすまさにそのときに（われわれ自身の意見で）実際に成立する真理条件を、話し手の文に対して割り振ることによって、われわれは最終理論への第一次近似を手に入れる。」 210

まず、話し手が文 p を真と見なしていることを理解する。

次に、聞き手が、その文 p が真となるように、その文の意味（真理条件）を理解する

### \* 寛大さは強制されている

「寛大さ(charity)は、選択可能なものの一つではなく、有効な理論を獲得するための条件である。したがって、それを是認すると大きな誤りに陥るかもしれないと説くことは、無意味である。真と見なされた文への真と見なされた文の体系的対応をうまく確立しないうちは、犯すべき誤りも存在しない。寛大さは、われわれに強いられているのである。」 210

その理由は次のとおりである。

「他者を理解しようと望めば、われわれは、好むと好まざるとに関わらず、大部分の事柄において彼らが正しいと考えなければならない。寛大さと理論の形式的条件とを調停する理論を生み出すことができれば、コミュニケーションを保証するために為しうるすべてを実行したことになる。それ以上は可能ではないし、また必要でもない。」 210

### \* 枠組の相違と意見の相違

「枠組みであれ、意見であれ、それらの相違に関する申し立ての明晰さと鋭さは、共有された（翻訳可能な）言語か、あるいは共有された意見か、いずれかの基盤を拡大することで増進するのである。実際、どちらにするか、はっきりした境界線をひくことはできない。」 211

### C 経験論の第三のドグマ（枠組と内容の二元論）への批判

#### \*一つの枠組みがあるのでもない

異なる概念枠があるのではない。しかし、「すべての人類は、——少なくとも言語の話し手はすべて——共通の枠組みや存在論を共有している、というすばらしいニュースを公表するのも、同様に間違いであろう。なぜなら、枠組みが異なることを理解可能な形でいい得ないとすれば、それらが同一であることもまた理解可能な形では言いえないからである。」 212

#### \*枠組みと実在の二元論を放棄する

「枠組みと実在の二元論のドグマを仮定すれば、概念の相対性と枠組みに相対的な真理とが与えられる。このドグマを欠けば、この種の相対性も消え去る。もちろん文の真理は言語に相対的なままだが、しかしそれは可能な限り客観的である。枠組みと世界との二元論を放棄することで、世界を放棄するわけではない。なじみの対象たちとの直接的接触を再び確立するのであり、またそうした対象のおどけた仕種が、われわれの文や意見を真や偽にするのである(re-establish unmediated touch with the familiar objects whose antics make our sentences and opinions true or false)」 212

#### \*ただし文の真理は言語に相対的である

デイヴィドソンは、概念相対主義を批判するが、しかし「文の真理が言語に相対的なまま」であることを認めている。

---